

## 18世紀後半の松前藩の発展について

はじめに

徳川家康から「黒印状」を得て、近世大名・松前藩が成立した慶長9年（1604）から寛政11年（1799）までの195年間を「前期の松前藩支配の時代」と位置付けると、この18世紀後半はその最終期にあたり、道廣（13世）と章廣（14世）の代になります。

道廣の治世は明和2年（1765）から寛政4年（1792）までで、章廣は寛政4年からとなり、大半は道廣の治世となります。道廣が藩主を継いだ時わずか12歳に過ぎなかったのに、重臣による藩政の掌握を専らとし、大手商人と知行主である家臣との場所請負経営の癒着から土風は墮落したとされ、その後、道廣が執権を得ても、その性格が頗る放縦（わがまま）なうえ、さらに驕奢（ぜいたく）を好んだので、藩の財政は益々窮迫したとされます。

また、藩の経営に関わる御用商人の幕府への公訴や和入地での漁民一揆、さらに寛政元年（1789）、蝦夷地東部のアイヌの人々が和人を殺害した「クナシリ・メナシの戦い」などが起りました。そして、天明3年（1783）の浅間山噴火前後には、天明の飢饉（1782～1787）があり、全国各地で百姓一揆や打ちこわしがおこるなか、蝦夷地周辺ではロシアなどの外国船の出没が立て続けにあったので、危機感を抱いた幕府は、吏員（役人）を遣わして蝦夷地を調査をするなど、蝦夷地に対する幕府の政策が顕著になってゆきます。

## 松前家13世道廣とは

道廣は、宝暦4年（1754）松前家12世資廣の長男として福山館に生まれ、幼名を源助と云いました。

その後、明和2年（1765）に父資廣が40歳で没したため、家督を継ぐことになり、12歳で松前家13世となりました。

道廣の人柄については、寛政7年（1795）に博識な知識人として松前に招聘された大原左金吾が寛政9年（1797）に著した『地北寓談』によれば、「此人生まれつきかしく、才智国中におよぶものなし」。撃剣、槍法、馬術に優れ、文学は好まなかったものの、従臣に読ませ「一遍して終身忘れざるの強臆あり」と記憶力の高さが記されています。

しかし、参勤で出府した際、藩財を使い江戸・吉原の遊女を2度も身請けし、松前に迎え入れたそうです。

## 道廣の隠居

天明6年（1786）8月に第10代将軍徳川家治が死去、老中田沼意次が罷免されました。翌天明7年4月、第11代将軍に家斉が就き、6月には白河藩主松平

定信が老中になり、寛政改革が推進されてゆきます。

この寛政改革が進行中の寛政4年（1792）6月、道廣は幕府に対し病気を理由に致仕（辞職）を請いました。旧松前藩士の新田千里が明治11年（1878）に脱稿した『松前家記』によれば、「六月十八日道廣久痼疾（ひびょう）エサルヲ以テ上書致仕を請フ、廿二日充サル」と記されて、39歳の若さで隠居しますが、その事情は他の公的記録にも一切記されていません。しかし、先の『地北寓談』によれば、「賢宰相（松平定信）」が改革を進めれば、「小国にして二人の娼婦をもとめつることの咎もあらんやの機を察して、はやく嫡子栄之介どの（勇之助「章廣」）に家国を譲りて、其身は退隠して大江介どの（大炊介「道廣」）ぞと申ける」と記され、定信による風俗の粛清が自身に降りかかるのを恐れて、道廣はいちはやく隠居したものと左金吾はみていたようです。

## 隠居後の情勢

道廣は隠居後も藩政を恣にし、藩主章廣は柔順に父の命に従い、重臣もあえて諫める者がなかったそうです。このような状況のなか松前藩の周辺では、寛政元年の「クナシリ・メナシの戦い」や、寛政4年（1792）のラックスマンの根室への来航、寛政8年（1796）、英・プロビデンス号の東蝦夷地アプタ（虻田）沖への来航があり、道廣は隠居の身でありながら出陣する事件がありました。

そして、翌寛政9年（1797）閏7月、松前沖に英国船が現れ、城下が大騒ぎになり、直ちに幕府に報告したところ、同年9月に参勤途中であった章廣の参勤中止と道廣（大炊介）の出府命令が幕府からありました。道廣は江戸に着くと幕府から滞府を命じられ、寛政11年（1799）2月には在府を厳命されたのでした。